

基本情報 ■作者：舟津求馬(生没年不詳) ■年代：天保3年(1832)

■寸法：縦23cm 横17cm 厚さ0.5cm



仙台藩に起こった悲劇を記す

今なお語り継がれる事件

本資料は享保3年(1832)に舟津求馬によって写されたもので、表紙表題は「仙台萩」とされている。本資料は写本で、6冊1組で構成されている。1巻目には、「奥州仙台萩(壹)」から「奥州仙台萩(拾壹)」までの目録が書かれている。このことからおそらく原本は11冊あったのではないかと考えられる。

「奥州仙台萩」は全巻にわたり、仙台藩3代藩主伊達綱宗*1の時代に起きた御家騒動、いわゆる伊達騒動について書かれている。例えば「奥州仙台萩(壹)」には、一般的に伊達騒動と呼ばれている寛文事件の主要人物である伊達宗勝、刃傷事件を起こした原田甲斐の名が記載されているのを見ることが出来る。

伊達騒動について書かれたものは、他にも仙台藩の「治家記録」、「伊達秘録」や「伊達実録」など多岐にわたる。

伊達騒動とは

江戸時代前期に起こった仙台藩の御家騒動である。寛文事件とも呼ばれている。万治3年(1660)伊達綱宗は不行跡により幕府から隠居を命じられ、綱宗の実子で、まだ2歳だった亀千代(後の綱村)が家督相

統することになった。その際、伊達兵部少輔宗勝(綱宗の叔父)と田村右京宗良(綱宗の庶兄)が62万石のうちからそれぞれ3万石を与えられて後見となった。

寛文6年(1666)に奉行として残ったのは柴田外記朝意原田甲斐宗輔(しばたげきとももとはらだかいむねすけ)、古内志摩義如(ふるうちしまよしゆき)であり、甲斐が特に重用された。寛文11年(1671)までに兵部らによって処罪された人数は120人、うち斬罪、切腹は17人を数えた。

他方で、伊達安芸宗重は伊達式部宗倫と寛文5年(1665)以来領地の境界紛争を重ね、寛文10年(1670)式部の死後裁定の不正を兵部らに訴え、さらに幕府に対し兵部、甲斐らの非違を訴えた結果、幕府の審理は寛文11年(1671)2月に開始された。

伊達安芸、柴田外記、原田甲斐、古内志摩が大老酒井忠清の邸に召喚されたが、審問の終わったところ、甲斐は突然安芸に斬りつけて即死させ、甲斐は外記、志摩らの手により斬殺され、深手を負った外記もその夜死亡した。

学芸研究員 砂金 春奈
実習生 永瀬 美希

用語解説 詳しくはP27へ

*1 伊達綱宗

学芸研究員の目



学芸研究員
砂金 春奈

この事件について、大槻文彦『伊達騒動実録』(明治42年・1909)では安芸忠臣説をとり、田辺実明『先代萩の真相』(大正10年・1921)では甲斐忠臣説がとられています。様々な解釈が伺えるのもおもしろさの一つです。

この資料のココがすごい!!

全国によく知られた御家騒動を書き写した資料です。

お気に入りポイント

伊達騒動は歌舞伎などの芸能の題材にもなり、また浮世絵にも描かれました。形を変えつつ語り継がれる、有名な事件です。